

私と農薬

誌名	日本農薬学会誌
ISSN	03851559
著者	田杉, 平司
巻/号	3巻特別号
掲載ページ	p. 555-556
発行年月	1978年12月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council
Secretariat



.....
 随 想

私 と 農 薬

田 杉 平 司

私が東大を出て、西ヶ原の農商務省農事試験場に就職したのは大正12年、関東大震災のあった年である。

入場してすぐ研究テーマにかかったが、学校を出たてのほやほやではろくな考えも出てこない。そこで、学生時代から関心をもっていた農薬の薬害を調べようと思った。

当時の農薬は今と違って、すこぶる原始的で硫酸銅、ボルドー液、石灰硫黄合剤、それに除虫菊、デリスくらのものである。ホルマリンを北大の伊藤誠哉先生の提唱で水稻の種殺消毒に使用するようになったのや砒酸鉛を使ったのもこれよりあとのことである。

薬害といっても、まず無機の酸、アルカリから始めて基礎的研究を行なうことにした。そこで、病理部長石山信一先生に径尺の瓦鉢を1,000個買っていただくようお願いした。石山先生も計画を聞いて、千鉢も一人で扱えるかと驚かれたようだったが承諾してくださった。対象作物はマイクロームで切りやすいものと考え、十字花科の植物をと思ったが、これは交雑が激しいので、成績検討のさい問題が起こるので、ハウレンソウを供試することとした。

さて、千鉢にハウレンソウは芽を出したが、並べる場所がない。そのころ、病理部の裏手に化学の永年肥料試験用のポットが埋めてあり、周囲は芝生になっていた。そこに、無断で鉢を並べ、ハウレンソウの生育を待った。数日経つと、化学部の米丸忠太郎先生から、ちょっと来いと呼びつけられ、あんな場所に鉢を置くなどもつてのほか、芝生が枯れるではないかと叱られた。平身低頭あやまる一方、苦しい事情を訴えた。昔の先生は判りが早く、理由さえはっきりすれば、釈然としてよろしいと使用を許された。

この試験は3年間ほど続けたが、マイクローム用の材料は棚に山積するし、一人で整理することは不可能と考えて農事試験入事務工程（大正12, 13年）に結果を簡単にのせて中止した。

その当時（大正12年ごろ）ドイツから国際興農社というのが農薬を輸入していた。ウズプルン、チランテン、

ゲルミサンなどであった。そこで早速小麦の黒穂病を使って、種子消毒の効力試験を行なった。ウズプルンはよく効いたが、種子に胞子の付着している場合だけで、病菌が土壌中に残る条黒穂病などには十分とはいえなかった。その他の薬はどれも大して効果はなかった。

国際興農社は2, 3年でやめた。ウズプルンはその後日本特殊農薬製造株式会社ができるまで日の目を見なかった。

昭和10年ごろ、山梨県から葡萄にボルドー液をかけるが、人体に害はないかと質問され、苦心解答したことがあった。これは人体に対する薬害の最初の質問だったと思う。

昭和4, 5年ごろ、日産化学で塩基性塩化銅を作り、これを農薬にどうかと相談をうけた。当時、日産には森山静記氏が居られ、よく打ち合わせ、白岡農場などを使って、試験をした。これは王銅という名前商品になった（昭和6年）。ちょうど時を同じうして三共で銅製品クポイドが売出された。

この少し前ごろ、森山氏から話があり、尾上哲之助氏と協同で、当時始末に困っていた晒粉を農薬にどうかと相談をうけた。いろいろ試験した結果、細菌性土壌病害には相当有効であることが判明した。しかし、遺憾ながらクロールの土壌残存期間が40日くらいあり、その間作物が作れないので、残念ながら実用にはならなかった。

そうこうしているうちに、日支事変から第二次世界大戦に移行するようになって、食糧増産が国の大仕事になり、農薬も整備、統制の面が強くなった。昭和16年12月、官民合同の農薬整備委員会が発足し、銅剤、砒素剤、デリス剤、ニコチン剤、除虫菊剤、アルカリ剤、鉱油乳剤、硫黄剤、展着剤、塩素剤、水銀剤に対し、名称の統一、含有成分、包装単位がそれぞれ定められ、銘柄はいっさい付さないことになった。

昭和22年5月9日には農林省認定農薬が定められたが、これは間もなく中止となった。

これより前、昭和17年、農林省からジャワへ赴任す

るよう話があり、昭和18年ジャワに赴任した。ここでも食糧増産で大騒をしたが、農薬はボルドー液、デリス剤くらいしかない。熱帯地のこととてことに虫害がはなはだしく、稲の白螟虫、椰子のアルトナ虫には発生予察を行なっていた。日本でも昭和16年から病要病害虫に発生予察が行なわれたが、当時のジャワのほうが徹底していたように思う。白螟虫は発生が山が降ってから播種

命令を出した（日本でも古いころ三化螟虫で同様のことを行なった）。アルトナ虫は発生がわかるとデリス剤と噴霧器を試験場から送付した。

ずいぶん長いあいだ農薬とも関係をもったが、いまの多種多様な農薬が出回っている時代とはまったく異なっていた。現在の農薬の盛況を見るとうたた感無量である。